

あとがき

日本経済新聞から「私の履歴書」を書いてみないかという勸奨をうけたのは、去年の初秋のことであった。諾否いずれともつかぬ生返事をしていうちに秋も深まってきて、日経側から「来年一月の履歴書欄は貴方のために保留してあります」と言われた時、これではもう断ることはできないものと観念した。それから私は急いで筆を執り、今年の一月、「私の履歴書」のタイトルで三十回にわたって、日経紙上を上げすことになった。

これは文字通り履歴書にすぎないもので、私の平凡な生涯を順を追って簡単に記録したものである。いわば私が歩いた山径の中、尾根をなすと覚しき節々を駆け足で追って行った点描ともいふべきものである。だから、その周辺に横たわる谷間の

状況や径の起伏についての叙述は十分ではない。他方、私の記憶も正確さを欠き、大切な人名だけでも、四名の方の名前が間違っていて、親切な読者から御注意を受けた程である。だから書くべくして書き尽せなかったことも多いだろうし、偏見や誤りが少くないことをおそれている。

しかし、こういったところを補って、平板なものを起伏のあるものにし、記録自体をもう一度資料にさかのぼってたしかめるとなると、勢い自伝的なものを目指さねばならぬことになり、それは到底私の力と時間の及ぶところではない。そこでこの際としては、日本経済新聞に載せた旧稿に最少限度の訂正と加筆を行うに止め、これに私の物の見方について理解をいただく一助として、折に触れて私が書きたいくつかの随想を添付して併読を願うことにした。

それにしても、顧みて私は、戦前、戦中、戦後、この空前にして絶後ともいふべき激動の時代を、よくも事無く生きながらえて今日を迎えられることができたものだとの感慨を禁じ得ない。何よりも、多くの良き先輩知友に恵まれ、その芳誼にあずかることができたことを感謝している。その間、これという誇るべき成功は勿論

なかつたが、幸に致命的な失敗もなかつたことを有難いと思っている。

ただ少壮の時代に学ぶことのあまりにも少かつたことが悔まれてならない。せめてこれから本気で勉強し、多少なりとも「蔵書邀友、積徳邀天」の境を覗いてみたいと願っている。

なお本書の刊行は、日本経済新聞社編集局と出版局の方々、並びに久保糾君の親切な勧奨と助言、私の秘書安田正治、小国宏両君の助力に負うところが大きい。ここに記して謝意を表したい。

昭和五十三年六月

大平正芳